大阪公立大学
Osaka Metropolitan University

PRESS RELEASE

配信先：大阪科学・大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会

2024 年 12 月 10 日
大阪公立大学

～利己的な他者を罰するよりも見て見ぬふりをする人々～
罰判断研究の新たな実験手法を開発

＜概要＞

利己的な行動をする他者に対して、自分の利益にならなくても労力をかけて罰を与える行為を「利他罰」と呼びます。この利他罰を与えるかを問う第三者罰ゲームの従来の実験では、参加者に他者の利己的な行動を強制的に観察させたうえで罰を与えるかを尋ねていたため、多くの参加者が利他罰を与えると示されてきました。しかし最近の研究では、他者の利己的な行動を見るかどうか選べる場合、見ないことを選択する可能性があることが示唆されていました。

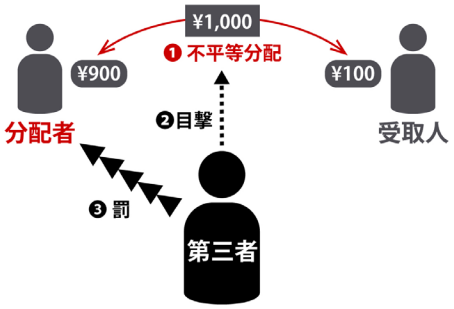

図 1 従来の第三者罰ゲームの実験例

大阪公立大学大学院現代システム科学研究科の三石 宏大大学院生（博士前期課程 1 年）、河村 悠太准教授らの研究グループは、近年の研究結果を踏まえ、現実社会に近い状況を提供する実験手法を開発。他者の利己的な行動の目撃回避は、参加者が不平等を目撃したくないという動機と、罰を与えることへの忌避の両方から生じていることが明らかになりました。また、不平等な場面の目撃を避ける傾向にある参加者でも、それを目撃せざるを得なかった場合には罰を与えることが示されました。さらに、間接的に罰を与える選択肢が与えられた場合、参加者が不平等な場面の観察を回避する可能性は低くなることも明らかになりました。これらの結果より、従来の第三者罰ゲームで高頻度に観察される直接的な罰は、参加者が不平等な分配を目撃することを回避できないというゲーム構造に起因している可能性を示唆しました。

本研究成果は、2024 年 11 月 2 日に国際学術誌「Journal of Experimental Social Psychology」にオンライン公開されました。

過去の研究で存在が示されてきた利他罰について、批判的な視点で研究を行いました。人々が利他罰を行わなければならない状況を回避することを示しただけでなく、その動機についてまで検討できたのは面白かったです。

三石 宏大大学院生

＜研究の背景＞

自分が並んでいる行列の後方で誰かが割り込みをしていたら、どう反応するでしょうか。たとえ自分の順番には影響がなくても、ルールを守るよう注意する人もいるでしょう。このように、利己的に振舞った他者に対して、自分の利益にはならなくても労力等のコストをかけて罰を与える行為を「利他罰」と呼びます。これまでの実験では、利己的な振る舞いに対し、多くの参加者が利他罰を与えることが繰り返し示されてきました。しかし、従来の研究では、参加者に他者の利己的な行動を強制的に観察させたうえで罰を与えるかを尋ねるという、やや現実離れした設定が用いられていました。現実社会では、利己的な行動に対して罰を与えるかの判断を迫られる前に、その場面を巧妙に回避できる場合もあります。冒頭の例では、行列への割り込みに気づかなかったふりができると考えられます。最近の研究では、他者の利己的な行動を目撃するかどうかを選べる場合、人は積極的に罰を与えるのではなく、利己的な行動の目撃を避ける可能性が示唆されていました。

＜研究の内容＞

本研究では、近年の研究動向を踏まえ、利己的な行動の目撃回避は罰を避けるために行われるのか、それとも単に利己的な行動を目にしたくないからなのかを調べました。また、利己的な行動の目撃を回避しようとした参加者が、利己的な行動を目撃してしまった場合、利他罰を与えるのかについても検討しました。

本研究で開発した「場面選択型第三者罰ゲーム」では、参加者が赤と青のデッキどちらか 1 つを選択すると、2 人の人物による金銭分配が表示されます。この金銭分配は、分配者が受取人に 1,000 円中 500 円を渡す平等分配か、100 円しか渡さない不平等分配のいずれかです。平等デッキでは不平等分配が 2 割の確率で表示され、不平等デッキでは不平等分配が 8 割の確率で表示されるようになっています。つまり、不平等分配を目撃する確率の高い不平等デッキを避けるということは、利己的な行動の目撃を回避していると解釈できます。

金銭分配を見た後に参加者が行うことは、ランダムに割り当てられた条件によって異なります。直接罰条件の参加者は、分配者を罰するかどうか、すなわち自分が労働課題を行う代わりに分配者から 300 円を減らすかどうかを判断し、罰なし条件の参加者は、受取人が受け取った金額を報告します。この一連の流れを 30 試行繰り返しました。

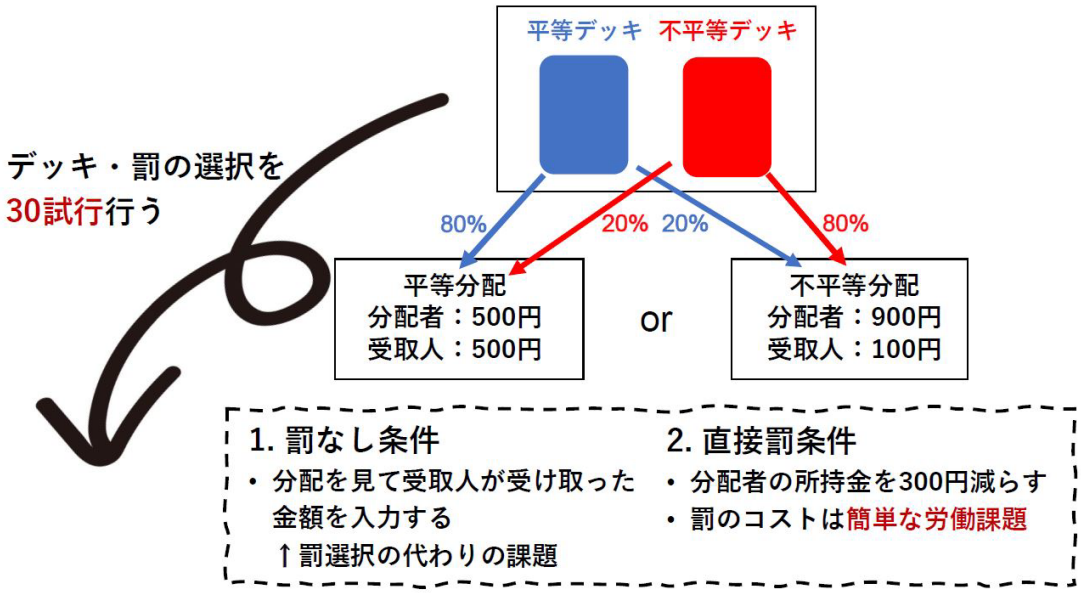

図 2 実験の概要

詳細設定や参加者、時期などが異なる 3 つの実験を通して、計 810 人の参加者がオンライン上でこの課題に取り組みました。実験の結果、罰の判断を迫られない罰なし条件でも利己的な行動の目撃回避が見られました。これは、他者の利己的な行動を見ること自体を避けたいという動機が働いたと考えられます。また、直接罰条件では、罰なし条件以上の利己的な行動の目撃回避が見られました。両条件の違いは罰の選択肢の有無であることから、罰を与えたくないという気持ちも回避に影響していたことが示唆されました。さらに、不平等デッキを避けた人が不平等分配を目撃してしまった場合の振る舞いについても分析したところ、不平等分配者に罰を与えることが示されました。これらの結果は、3 つの実験で繰り返し再現されました。

＜期待される効果・今後の展開＞

本研究結果は、先行研究では多く見られていた利他罰が、現実社会ではそれほど行われていない可能性を示唆しています。今後は、利他罰の代わりにどのような要因が人々の利己的な振舞いを抑制し、協力的な社会を維持しているのかについて、さらなる検討が必要です。

＜掲載誌情報＞

【発表雑誌】Journal of Experimental Social Psychology
【論 文 名】Avoidance of altruistic punishment: Testing with a situation-selective third-party punishment game
【著　　者】Kodai Mitsuishi, Yuta Kawamura
【掲載 URL】https://doi.org/10.1016/j.jesp.2024.104695

【研究内容に関する問い合わせ先】
大阪公立大学大学院 現代システム科学研究科
准教授：河村 悠太（かわむら ゆうた）
E-mail：ykawamura@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】
大阪公立大学 広報課
担当：谷
TEL：06-6605-3411
E-mail：koho-list@ml.omu.ac.jp